

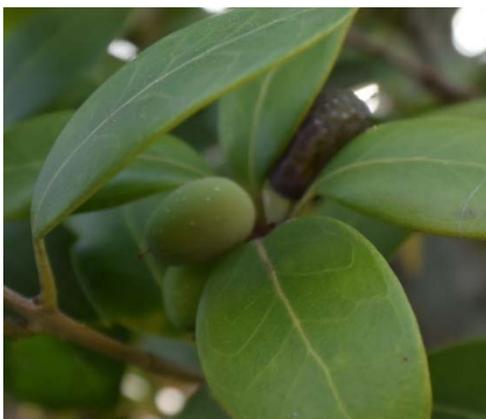
ヒイラギ

牧 幸 男

木偏に春はツバキ、冬はヒイラギである。漢字の素晴らしを実感している。冬の字を持つヒイラギは冬を代表する植物であるが、せいぜいクリスマスの時連想する程度となっている。しかし、クリスマスに関係するヒイラギは、私達が知るヒイラギと全く違う植物で、モチノキ科でヒイラギモチ（セイヨウヒイラギ）と呼び、私たちの身近で見るヒイラギはモクセイ科と「科」が違う。更に、ヒイラギモチは花期が5月、秋から冬にかけて赤い実を結実するが、ヒイラギの花期は11月末頃で、黒い実を春に熟す。樹高はヒイラギモチは高さ10m以上に成長するが、ヒイラギはせいぜい3m程度である。また、ヒイラギモチは、昭和になって輸入された植物だが、ヒイラギは日本特産である。牧野富太郎博士は「ヒイラギモチはクリスマスの飾りに使うこの葉を、単に鋸歯の点だけに着目してヒイラギの仲間と誤り西洋産のヒイラギと呼んだもの。良い名ではない。」と述べている。

ヒイラギには類似植物が多く、ヒメヒイラギ、オニヒイラギ、キッコウヒイラギ、マルバヒイラギ、ヒイラギモクセイ等多く生育するが、これらは和風のイメージがつかまとうためか、近年ではあまり見受けられない。代わって、葉に模様が入るシマヒイラギ、ファイリヒイラギ、キフクリンヒイラギ、ゴシキヒイラギなどが洋風住宅の庭を彩るカラーリーフとして好まれるようになった。

クリスマスのリースに使うモチノキ科のセイヨウヒイラギ（ヒイラギモチ）は、ヒイラギと葉は似ているもののヒイラギは葉が一箇所から左右に発生する「対生」だが、セイヨウヒイラギは互い違いに発生する「互生」であり区別できる。更に、果実の色がセイヨウヒイラギは「赤」、ヒイラギは長野県の結実が珍しいが「黒」である。その他、ヒイラギの葉は鋭い鋸歯が特徴的なため、それに似た葉を持つものは「ヒイラギ」の名を与えられる例がある。外来種ではヒイラギナンテン、琉球列島に生育するアマミヒイラギモチ（モチノキ科）、ヒイラギズイナ（スグリ科）がある。また、ヒメヒイラギ（モチノキ科）やリンボク（バラ科）があり、往々にしてヒイラギと間違えられることがある。



ヒイラギの果実



ヒイラギモチの果実

ヒイラギは、関東以西から台湾の山地に自生、又は庭木や垣根に植えられている常緑の小高木である。葉縁は各側1～3三個の先が尖った棘状になった鋭い鋸歯がある。秋、葉腋に花柄のある白色の小さな花を散形に束生し良い香りがする。核果は楕円形で黒紫色に熟す。長野県内ではヒイラギの白い花の澄んだ香は冬の風物誌となるが、寒さが厳しいため結実することはあまりない。私のヒイラギの思い出は、子供の頃この葉を指の間に挟み、口で吹き葉を風車のように廻して遊んだことである。この時、葉を強く指ではさむと痛く、軽くと葉はよく廻るが、強く息を吹くと葉は何処かへ飛んでしまい、はさみ加減の調節が難しかった記憶が残っている。



主なヒイラギの花 (左からヒイラギ、ヒイラギモチ、ヒイラギナンテン)

ヒイラギと日本人の生活のかかわりは、魔よけの効果が信じられるようになった頃からである。古い記録に『古事記』(712)の中で大和武尊が東征に際し、比々羅木之八尋矛を賜った記述、『続日本紀』(797)の造宮職などが献上した八尋のヒイラギを、文武天皇が伊勢大神宮に奉じた記録等がある。また、紀貫之(866~872?)の『土佐日記』(935)の元旦の項に「今日都のみぞ思ひやらるる、小家の門の端出之縄、なよしの頭の、ひひらぎ等いかにとぞ言ひあへなる」と、京の風習を懐かしむ箇所がある。この文中の「なよし」は、ぼら このしろ鱈や終などのことで、今日の節分に門口に鰯の頭とヒイラギを飾る伝統習慣の原型である。ヒイラギの葉にある刺は鬼の目突と言われる。この目的は魔よけ、鬼除けのためヒイラギの枝に鰯の頭と共に門口に立てると鬼が痛い棘を恐れ、頭の腐敗臭に驚いて逃げ去ることを願ったためである。

自生のヒイラギを園芸用に盛んに改良したのは元禄時代(1688~1704)で、この経過は『花壇地錦』(1695)に記述されている。更に、江戸後期になると品種改良が更に進み『草木奇品家雅見』(1827)には、黄斑の入る「黄金ヒイラギ」、芽出しの時は紅紫色の「染井五三郎つづれ」など7種が紹介されている。詩歌に詠まれるのは、明治以降が多い。

ひひらぎの 白き小花の 咲く時に いつとしもなき 冬は来むかふ 齋藤茂吉
門にさして おがまるるなり 赤いわし 小林一茶

ヒイラギの日本名の漢字は疼木(疼とも書く)である。由来は、疼はひいらぐ(痛む)の意味で、葉の棘に触れると疼痛を起こすからである。また、この棘に触れると皮膚に痛みを感じるので、疼木の字を用いると言う説がある。漢名にくこつ狗骨を当てることがあるが、この字はヒイラギモチを示している。別名にひらぎ、鬼の目つき、こうくじゆ杠谷樹等がある。学名はOsmanthus ilicifoliusで、属名はギリシア語のosme(香、匂)+anthos(花)の合成語、種小名はヒイラギモチのような葉を示し、花に香気があるヒイラギモチに似た植物の意となる。この植物の特徴は、成長すると、葉の刺が自然に消えることだ。年輪を重ねると次第に刺がなくなり角が取れて丸くなる。人間もこうなればと思うこともあるが、無理だろうと思ってしまう。蛇足であるが、ヒイラギの葉の変性から、若木のヒイラギをオニヒイラギ、老木をヒメヒイラギと呼ぶそうである。

薬用には、樹皮のアルコール漬けが、足腰の衰えに(民間)使われてきた。

我々が一番膾炙しているのは「魔除け」として節分にヒイラギの小枝と焼いたイワシの頭を門戸に飾り、魔除けにしてきたことであろう。このため鬼門除けに、家の庭の表鬼門(北東)にヒイラギ、裏鬼門(南西)にナンテンの木を植えると良いと信じられてきた。今日のように医療が発達してない時代、魔よけは日本人にとって身を守る一番の対策であったのだろう。

幹は直立するが枝分かれが多く、大きな材木とはれない。しかし、緻密で材に狂いが生じにくいことから、ソロバン玉、楡、将棋の駒、印鑑、楽器(三味線のバチ)などに用いられる。特に、幹は堅く、しなやかであることから、衝撃などに対し強靱な耐久性がある。このためげんのう おおかなづち玄翁の大金槌の柄に使用されている。熟練した石工はヒイラギの幹を多く保有し、自宅の庭先に植えていたと言われている。

花言葉は「用心深さ」「先見の明」「保護」である。